



油絵具「油一（ゆいち）」完成。

東京藝術大学

ARTISTS' OIL COLOR

YUICHI

油絵具「油」 開発から発売まで

秋本貴透

〔東京藝術大学美術学部油画技法材料研究室〕

春日敏夫

〔ホルベイン工業株式会社〕

対談



あきもと・たかゆき〔東京藝術大学美術学部油画技法材料研究室〕



かすが・としお〔ホルベイン工業株式会社・技術部開発係長〕

2007年、東京藝術大学は創立120周年を迎える。この記念事業の一環でもあり、産学共同プロジェクトとして、これまでにない新しい油絵具の開発・製品化が行われた。日々、絵具に触っているプロ、つまり画家の意見を取り入れた「理想的な油絵具の研究」というテーマからどんな絵具が生み出されたのか。研究を行った東京藝術大学美術学部油画技法材料研究室と絵具製造メーカーであるホルベイン工業株式会社の、それぞれの現場で開発に携わったお二人にお話いただいた。

藤田千彩 | 取材・構成 森田兼次 | 写真

大学×メーカーによる プロジェクト始動

東京藝術大学にある、油画技法材料研究室。普段ここでは、絵具の材料と表現にかかわる研究が行われている。プロジェクトのきっかけは、6年前、絵具メーカーであるホルベイン工業株式会社が東京藝術大学の油画技法材料研究室に共同研究を申し入れた頃にさかのぼる。「理想的な油絵具の研究」というテーマが打ち立てられ、東京藝術大学油画技法材料研究室、ホルベイン工業株式会社の技術部を中心としたプロジェクト・メンバーが結成された。

絵を描く身に立ったとき、現在製品化されている絵具は、色調、伸び、変色などの点で、果たして望むものなのだろうか。絵具が手練りでつくられていた近世、チューブ油絵具が登場した近代と変わらない品質、使い勝手を備えているだろうか。ほんとうの油絵具とはどんなものなのか……。国内屈指の絵具メーカー、ホルベイン工業が追い求める「画家

にとってより良い絵具」を模索するプロジェクトが始まった。

重ねられていく試験のもとで

秋本 今回のプロジェクトでは、ホルベイン工業さんから送っていただいた絵具でひたすらサンプル作成を続けました。絵具は、メーカーによって色、粘性などが異なります。「バミリオン」や「コバルトブルー」と一言でいっても、国内、海外のメーカーによって、色などのばらつきがあるものです。そういったなかから、普段、使い手となる画家は自分の好みや、メーカーあるいはブランドのイメージによって選別し、絵具を用いています。

春日 メーカーとして「絵具とは何か」という疑問があり、絵具の本質を見直すことからスタートしたプロジェクトでした。秋本先生には、8社、13種類のメーカーの同じ色の絵具を、メーカーがわからないように、われわれが用意したチューブに詰め替えてお送りして試験に使っていた



秋本氏によるサンプル作成の様子。色数、絵具メーカー、地塗りなどを変えて試験。その数は1000枚以上となった

理想的な絵具づくりへ

春日 試験結果は想像通りで、さすがによく見ていらっしゃるなという感じだったのですが、新しい絵具をつくるにあたって、どういう方向性を目指していくべきか、ということが次のステップになりました。それで、この評価試験のなかにメーカー品以外に顔料と乾性油だけで練った絵具を加えようということになったんです。もともと、油絵具というのは油と顔料だけで手練りでつくっていた。顔料と油だけで練った絵具というのは、どういう評価を受けるのか試してみたいんです。油画技法材料研究室には三本ロールミルという、絵具をつくる機械がありますので、それを使って秋本先生といっしょにつくって、この「評価」のなかに入れました。

今回、最終的に完成に至るまでのきっかけとなったのは、その絵具づくりで秋本先生に絵具とはどういうものかということを感じていただ

だきました。それぞれの絵具を、白亜地（水性）、エマルション地（半油性）、油性地のキャンバスに塗っていつもらいます。その結果を、ホルベイン工業の「HOC（ホルベインアーチストカラー）」を基準に評価してもらうのが、初期段階ですね。

秋本 まず絵具をチューブから出した「外観」、3種類のオイルに溶かして塗る「描画性能」、ジントク、シルバ

ー、チタニウムという3種類のホワイトと混ぜて混色性と発色をチェックする「混色性能」、筆による塗り、ひっつき、ペインティングナイフによる塗りを試す「表現性能」、できるだけ少ない量で薄く伸ばして塗る「淡彩」などの試験項目でランクをつけていきました。試験結果は、ホルベイン工業の技術部へフィードバックしていきます。さらにメーカーの絵具だけ

でなく、藝大オリジナル絵具として、顔料とリンシードオイルだけで練った油絵具も入れて試しました。こうして絵具が塗られたキャンバスは、千枚にもおよびました。試験結果を春日さんにお渡しすると、春日さんが絵具をつくる側のデータとして数値化して、ホルベイン工業社内ですべて検討していくことの繰り返しでした。

いたのが、一番大きかったんじゃないかと思っています。

秋本 体感しながら試験を行っているうちに、市販されている絵具の特性、品質の基準のようなものが見えてきたんですね。僕自身がここで三本ロールミルを使って絵具をつくることって、今までではなかったわけです。

絵具を三本ロールミルでつくっていつて、ああ、絵具って、これでもできるんだなど。これまではチューブに入っているものを買ってきて、そのまま、あるいは混ぜ合わせて使っていた。だから、チューブに入れる前の状態のことなんて、あまり考えていなかった。そういう意味では新鮮でした。

春日 メーカーとしては、油絵具は主力製品なので、技術、営業、製造の各部署のメンバーを集めて、これまでの絵具でいいのか、さらに良い油絵具とはどういうものか、社内で検討しました。営業は売れるものを希望し、技術は耐久性や安定性を望み、製造は一定の品質でつくりやすいものになります。またユー

ザーはコストパフォーマンスとより良い品質を求める、と立場の違いで考え方もまったく違う。それぞれの理想とするものがある程度平均化して、満足できるようなたちにしていくのが、市販されているチューブ絵具なのでしょう。しかし実際に絵具を使う人たちが要求するものは、もっと別のところにあったのです。

今回のプロジェクトでは、これまでの市販品にはなかった、「画家の理想とするもの」を一番重視したかたちでつくり上げよう。むしろ、そのほかの面は排除してしまってもいいじゃないか。商品設計としては、それが最初の漠然としたコンセプトになったわけです。

秋本 「理想的な油絵具の研究」というテーマでは、今までの絵具より品質が上のものをつくらなくてはならないと思っていました。試験をしていると、藝大でつくった絵具はすぐわかるわけです。見るからにドロドロしていて、ぜんぜん違う形状ですから。顔料に対してぎりぎりのリンシードオイルで練ってつくって

いるので、そのまま使うのは粘りが強すぎて、硬くて伸びないし、厚塗りもしづらい。くせがあるというか、工夫のいる絵具です。

でも、発色がすごくきれいなんです。使いづらい点もあるので、マイナス評価も当然出てくるんですが、顔料そのものの鮮やかさというか、すごく生々しい感じが、ほかの絵具とはぜんぜん違う。そこが今回のこの絵具の出発点であり、原点になっていると思うんです。

春日 顔料とリンシードオイルだけでつくられた絵具は、確かに発色はすばらしいのです。ただ、顔料によっては粘りがなく、バサバサになってしまうなど、製造レベルでの問題も多い。また、チューブから出したときの硬さ、つまり絵具の形を保つという点で、販売できるかどうかという点にもなっています。そこで、種々の添加剤の配合を検討し、できるだけ顔料とリンシードオイルだけでつくった絵具に近い形でのサンプルをいくつか提案し、「理想的な絵具」に近づけていきました。



「油一 YUICHI」の試作品。色によって、顔料とリンシードオイル、各種添加剤の配合を変え、製品に近づけていった



秋本 画家にとってみれば、絵具は素材のひとつですから、いま市販さ

れているものがダメというわけでは

ないんです。ただ、油絵具そのものの側にスタンスを置くことで、画家の感覚的な部分が覚醒されるのではないのでしょうか。

要するに、自分が絵を描いているときに、どこまで絵具のことを考えて描いているかということになるわけです。実際には意外と無意識に塗っている。でも、今回、これだけ試験をやってみると、粘性として「塗り心地がいい」ということがわかってきたんです。もちろん視覚的な部分での「発色の良さ」もとても気になるんですが、触覚的な部分も画家の感性

につながるものがあるんじゃないでしょうか。

その名は「油一 YUICHI」

こうしたプロセスを経て、東京藝術大学×ホルベイン工業株式会社による新しい絵具ができた。彩度が高く、鮮明な発色、混色しても濁らず、透明性も高い。粘性もあるが、滑らかに塗ることもできる。芸術家（専門家）が理想とするであろう油絵具がここに誕生した。日本の油絵具の歴史がイメージされたり、油絵具の本質に戻ることも鑑み、付けられた名前は「油一 YUICHI」。

30色セットと12色セットの2種類あり、12色セットは色による2パターンがそろう。パッケージにもこだわった。はんこをイメージして「油一」の名が光るキャップは、油絵具が固まったときでも開けやすいように大きな六角形となっている。デザインについても東京藝術大学デザイン科の協力によるパッケージ、ポスターなどを展開する。そして当面は、大学内にある「藝大アートプラザ」でのみ販売されるとのこと。東京藝大ブランドとして、産学共同プロジェクト製品として、油絵具「油一 YUICHI」は、創立120周年を迎えるこの5月に初めて世に出る。

対談は、2月8日、東京藝術大学油画技法材料研究室にて収録



右2点——「油一 YUICHI」の製品イメージと色サンプル。キャップは絵具が固まっても開けやすい大きな六角形で、はんこをモチーフとした。パッケージ・デザインのディレクションは、東京藝大デザイン科の松下計教授によるもの。また絵具の開発は、油画技法材料研究室の佐藤一郎教授、大西博准教授、植本誠一郎氏（ホルベイン工業嘱託・元技術部）らによって行われた